Nyāya Vaiśeṣika の Pākaja 理論および Vaiśeṣika-sūtra 7-1-10, 11

宮　元　啓　一

一

(一) 熱を受けて物質（地より成るものに限る）が変化する現象を原子論のひとつの展開として説明したものが Nyāya Vaiśeṣika の pākaja 理論である。Vaiśeṣika 学派によれば、黒色の軟かな粘土の水差が火の第一の打撃によって原子段階にまで解体し、第二の打撃によってその原子から黒色等の性質が消滅し、第三の打撃によって赤色等の性質が現われ、さらに享受者の adṛṣṭa によって再び原子が統合されて最終的に堅い赤色の素焼の水差が形成される。このような、地に固有な諸性質が一時的にであれ捨象される段階を通過せしめる pākaja 理論の必然性は Vaiśeṣika-sūtra（以下 VS）7-1-4, 5, 6, 7, 8, 9, 12, 14. に詳細に説かれている。ところが現象の常識的な解釈にもとづき、Nyāya 学派の側からこれを批判するかたちで、水差全体そのままにおいても pāka が起きるとする別の pākaja 理論が唱えられた。その論点は、(1) pāka を受ける前後の水差の同一性の認識、再認識（pratyabhijñāna）、(2) 水差は多孔質（sāntara）であり、その間隙から火の微粒子が侵入して全体に行きわたる（aṇu-praveśa）、という二点である。古来この二つの pākaja 理論のうち前者は pilupāka-vāda（以下 pil.）、後者は pitharapāka-vāda（以下 pith）と名づけられる。詳しい考察は省くが、pith. の起源は新しく、恐らく4c後半～5c中頃に発生したものである。Nyāya 学派がその主唱者であるが、Mīmāṃsā 学派の側からも特に再認識論の立場から pith. を支持する論議があることが Nyāya Vaiśeṣika の文献に見え、これを根拠に pith. の Mīmāṃsā 起源の可能性を指摘する人もいるが確定的なことは明らかではない。

(二) VS 7-1-11 は Upaskāra にはなかつた sūtra であり、また VS 7-1-10 はこれまで必ずしもその読み方が明確ではなかつたと思われるので、ここで若干検討してみたい。VS 7-1-10 は Candrānanda の Vṛtti（以下 CA）によれば次のとおり。kāraṇagunapūrvāḥ pṛthivyāṃ pākajāś ca. これを CA は次のように解釈する。「恒常でない結果としての地の場合には、原因の性質にもとづいて色等が生ずるが、恒常な原子としての地の場合には（色等は）pākaja のものである。」Praśastapāda の Bhāṣya（以下 PBh.）の説明もほぼ同様である。これに対して著者不明の Vyākhyā（以下 Vy.）は次のように解釈する。「したがつてある時には結果としての地の場合には色等は原因の性質にもとづき、ある時には pākaja のものである。しかるに地の原子の場合には（色等は）pākaja のものだけである。」Upaskāra の解釈には sūtra の読み方そのものを断定せしめるものがない。このように、CA, PBh. によれば結果としての地の色等は原因の性質にもとづき、原子としての地のそれは pākaja のものである。Vy. によれば前者は原因の性質にもとづく場合と pākaja のものである場合との二様であるが、後者は pākaja のものだけである。このような解釈の差は、ほかでもなく CA, PBh. がいわゆる pil. の立場をとつているのに対し、Vy. が pith. の立場

をとつていることに根ざしている。また、Vy. は pīl. の pākaja 理論を否定しつつ、VS 7-1-10 に対する pīl. による解釈を次のように紹介している。「しかるに、Ātreya, Praśastapāda 等によれば『kāraṇaguṇapūrvakāḥ pṛthivyām』という sūtra は、結果としての地の色等は原因の性質にもとづく、ということを示したものである。一方、火との結合によつて『pākajāś ca』という sūtra は、原子としての地の色等は pākaja のものである、ということを説いたものである。」Ātreya が VS にどのような註釈を加えたか現在のところ必ずしも審かではないが、Ātreya, Praśastapāda 等のなかに CA も含まれていることは確かなことだと思われる。以上のごとく、VS 7-1-10 には二つの立場から解釈が加えられているが、VS の本来的な読み方を pīṭh. の立場から確定することは妥当ではない。なぜなら、先にも触れたように、pīṭh. は VS の成立時期よりもはるかに下つた時代に、Vaiśeṣika 古来の pākaja 理論（いわゆる pīl.）を批判することから生じたものだからである。したがつて VS 7-1-10 は、CA, PBh. の解釈に従つて次のように読むべきである。「（結果としての）地の場合には（色等は）原因の性質にもとづいて（生じ）、また（原子としての地の場合には、色等は）pākaja のものである。」かくして VS 7-1-11 も同様にして次のように読むべきである。「（結果としての）水、火、風の場合には（色等は）原因の性質にもとづいて（生ずる）。（しかるに原子としての水、火、風の場合には）pākaja の（色等）が存在することはない。」（apsu tejasi vāyau ca kāraṇaguṇapūrvāḥ pākajā na vidyante.）

㈢ pākaja 理論の論理構造について。いわゆる pīl. は次の三原則の上に成り立つている。(1)相容れない二つの性質が一実体に存在することはあり得ない。したがつてある性質が現われるためには、すでに前の性質が消滅していなければならない。(2)ある性質が消滅するためには、その内属因である実体が消滅あるいは解体しなければならない。(3)結果の性質は原因の性質にもとづいて生ずる。かくしていわゆる pīl. は原子論という形態をとりつつその機械論的な立場を一貫させているが、pīṭh. は(1)を認めはするものの(2)(3)をないがしろにしている。これはこの pīṭh. の立場をとる Nyāya 学派が一応原子論を保持しつつも、自然界の諸現象をそれなりに科学的に解明しようとする自然哲学としての姿勢を放棄していつたこと示唆する。また、pīl. によれば、第二の火の打撃によつて黒色等が消滅してから第三の打撃によつて赤色等が現われるまで、瞬間的にではあるが一種の地の原子のプラズマ状態が出現する。この状態において、色、味、香、触なる地という実体にとつて基本的な諸性質に関して、地の原子は全く無規定の実体となる。すなわち地の原子はまさにその「地」の原子である根拠を失なつてしまつているのだが、それにもかかわらず次の瞬間には再び地に固有の諸性質を獲得するように説かれている。これは明らかに Vaiśeṣika の原子論の、取り繕おうとして繕いきれなかつた躓きである。この躓きは実は Vaiśeṣika 哲学の根本教義、つまり実体とその属性を全く独立した実在的原理としたことに由来するものである。実体を自己完結的な原理として確立したことによつて、かえつてその実体そのものが無内容なものとなつてしまつているのであり、ここに仏教徒などから鋭い批判が投げかけられた。このように、自然哲学 Vaiśeṣika の多元論・機械論の破綻が、pākaja 理論（いわゆる pīl.）においても露呈されていることを我々は見ることができる。